

「豊岡演劇祭に見る、豊岡市のこれからの
シビックプライドについてのドキュメンタリー」

文化構想学部社会構築論系 4年 金岡大樹 1T170261
浦野ゼミ 卒業論文

目次

1 イントロダクション	p3
1-1 「札幌にて」(2016/12の札幌での平田オリザ講演会) —明らかにしたいこと—	p3
1-2 「札幌から」—執筆者の基本的問題関心—	p3
1-3 「城崎にて」(2019/9の第0回豊岡演劇祭) —調査対象地—	p5
1-4 「地域介入をエッセイでレポートすること」—研究目的・研究方法—	p7
2 地域と文化資本問題	p9
2-1 地方地域における文化資本とその格差	p9
2-1-1 ピエール・ブルデューの文化資本論	p9
2-1-2 平田オリザの文化の自己決定論	p12
2-2 自治体の地域づくりと文化芸術	p12
2-2-1 アーティストインレジデンス	p14
2-3 兵庫県豊岡市の豊岡演劇祭の取り組み	p15
2-3-1 兵庫県豊岡市概略	p16
2-3-2 豊岡演劇祭及び豊岡市の地域交流政策概略	p16
3 地域介入エッセイ本論	p18
3-1 実態のない「豊岡」というまとまり 竹野という地域と豊岡という地域。 Iさん(ゲストハウスの主人)	p19
3-2 “大交流”は可能か—「文化的センス」とアーティストら地域介入— Mさん(地域おこし協力隊 演劇祭の運営委員)	p23
3-3 小さな世界都市に向けて—城崎のシビックプライドの形成— Mさん(城崎温泉旅館 若女将)	p27
3-4 盛り上がっていない感—地域問題の露呈—	p30
3-5 地域が演劇を受け入れる最中—演劇作品と地域との関わり—	p32
4 これからの豊岡と演劇祭への展望	p34
4-1 「豊岡にて」はいつ産まれるか—議論の確認—	p34
4-2 「東京にて」コンクリートか人かという言説との戦い—アウトロダクション—	p35
論文構成	p37
謝辞	p38
参考文献	p39

1 イントロダクション

【1章概要】

研究（執筆）動機（＝文化資本格差論）に触れつつ、地域と演劇について論述することを指摘する。東京の一極集中による文化拡散から降り、地域レベルで文化芸術を創造していくこととシビックプライドの重要性について述べる。

中でも、自身の平田オリザ氏の地域創造の捉え方との出会いに触れ、創造都市（としての札幌）と創造村落（としての城崎）についてのそれぞれの魅力を語り、以降の豊岡（城崎を内包する地域）の語りにつなげる。(1-1) 自身のこれまでの演劇と地域体験を基に、執筆者についてこれまでの経験について述べる。(1-2) 演劇的、地域活動のレベルで魅力ある地域である兵庫県豊岡（城崎）について前年度に観劇した第0回豊岡演劇祭について触れる。(1-3) 自身の今後の演劇活動への展望を前提に、自身が観客、つまりは第三者として地域介入することをエッセイという形式でライティングする意義について述べる。豊岡からその地域、地域と文化芸術の今後の関係性について触れる。(1-4)

1-1 「札幌にて」

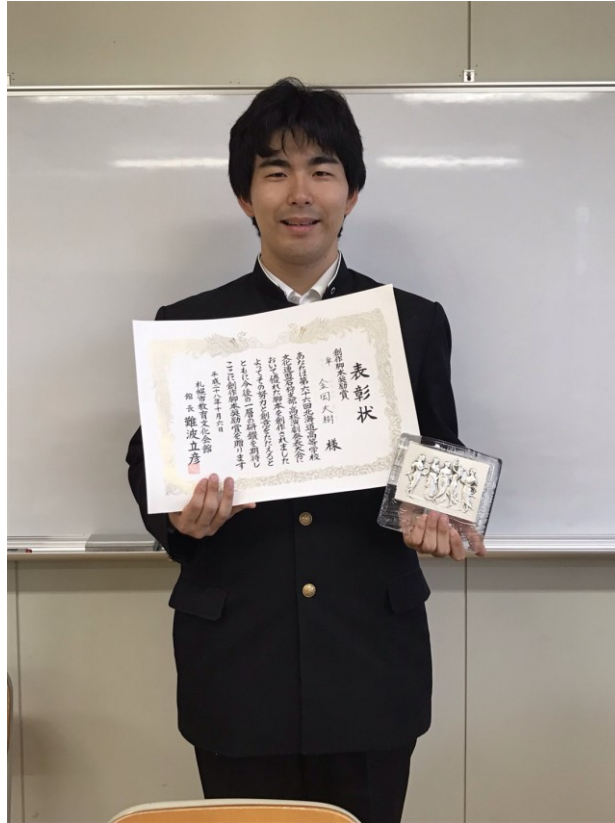
2016年12月3日、当時北海道札幌市の高校生だった私は、「新しい広場をつくる～市民芸術概論～」という題のシンポジウムを聴講した。プレゼンターは、劇作家で地域の文化政策に詳しい平田オリザ氏だ。札幌の文化芸術創作発表の拠点となる「札幌市民プラザ」の開業を2018年に控えた札幌市が、市民のためにどのように活用していくべきかを議論するために開催したものだ。そこで私は、平田オリザ氏の言うところの「文化の自己決定能力」という概念に出会う。講演は『新しい広場をつくる 市民芸術概要綱要』（平田,2013）の内容を基に語られた。要旨は、「経済的に衰退していくこの国の中で、人々が自らの土地への“文化的な自己決定能力”を持つことが必要である。更にはそれには、文化芸術ひいては演劇が有用なのだ」ということだ。思えば、この日の平田氏の講演会での「文化的な自己決定」との出会いが自身の学部生活の興味関心の全てであった。札幌市民として生まれ育ち、大学進学の際には、“理想郷的な”文化度の集積にだけ憧れ、「上京」をした。札幌という土地は決して、“文化のないまち”というわけでは無かった。しかし、ただ都会的で人々がそこで地域的な自らの町へのアイデンティティを持って、誇り高く文化活動やすべての地域活動を行っているようには感じられなかった。本論文では、自身のこのときの、演劇と社会との関わり、を起点に、“地域と演劇”を現状の日本における地域社会の実情をドキュメンタリーとして語る。これ以上、経済成長は望めない（はずの）日本社会を憂いながら。それでも、文化芸術とともに、私たちが地域の中で少しでも豊かに生活していけると信じて。

1-2 「札幌から」

さて本ドキュメンタリー執筆にあたり筆者のこれまでの興味関心についてライティングしておく。第三者として地域介入をする、私自身が、どのようにして、「演劇を題材に、地

域について」考えようと思ったについての説明が必要である。自身がどのような意図を持ち、これまで演劇について捉え、大学生の興味関心テーマとして地域問題について扱おうと思ったのか、ということは予め触れておきたい。

筆者の演劇との本格的な演劇との出会いは高校生での部活動での創作活動だった。2014年4月、地方都市、北海道は札幌で高校生活を始めようとしていた。交通機関を60分かけてわざわざ市内有数の”そこそこ勉強のできる”高校に通うことを選んだ。高校生活で演劇を部活動に選ぼうと思うに至った理由にも、「家庭の影響」が大きくあったように思う。母に連れられて母の好きな札幌市内の演劇を観る機会は以前からあったし、父の影響で邦画を同級生よりは観る機会があったと思う。小さなキッカケで演劇部を、小さな頃からの影響で（文化資本蓄積により）、部活動に選んだ高校時代の私は、演劇の表現としての面白さにどんだんのめり込んでいた。演劇的表現を感覚として手に入れ、演劇の発表会で観客からの評価を受けるためには、とにかく演劇を観るしかなかった。札幌市内の大小問わず劇場に毎週通い、高校二年生のときには年間で70本の演劇を観た。間違いなく札幌市内の高校生の同級生の中では、演劇を一番観ていたと思うし、自然に札幌という地域の中で演劇を考えるようにはなっていた。演劇の台本を書いて、年に一度の発表会で評価されることが、高校時代での活動の中心であった。高校での学習状況もそこまで芳しくはなかったように思うが、それはある程度の進学校での中での成績順位の話であったように感じる。札幌市内の演劇を観て、時には小劇場に役者として舞台に立って行く中で、”もっと面白い”演劇に関わりたい、という気持ちが強くなり、自然と大学進学に向けて上京したいという気持ちが強くなっていった。その中で、平田の講演会だった。既に大学進学が決まっていたときに、自身に提示されたのが、地域と文化資本の問題であった。大学進学の際の指定校推薦の作文には、演劇を演劇として学びたい、ということを書いたのを覚えている。しかし、圧倒的に札幌の演劇のことを、”なんだか”つまらない”ものだ”と思っていた私は、その札幌の演劇の面白さについて、文化資本の問題から人々のセンスの問題であるという平田の議論に大きく興味が湧いた。そこから大学での学びの軸には、自身の出身地である札幌を踏まえた”地域”の問題が置かれているように思う。大学に入り、”演劇の盛んな”早稲田大学に入ったことで、演劇サークルでの活動を中心に、おなじように演劇がしたい同級生らと創作活動をたくさん踏まえてきた。演劇創作の活動についても、常に念頭にあったのは、”対話的に私たちは私たちの問題を解決できるのか”というセンスのすり合わせのことだった。同年代の私たちが、共に、演劇創作やサークル活動の課題解決をするなかで、その課題を課題と捉えるそれぞれのセンスについて多くの葛藤があった。その葛藤と、地方の抱える問題解決への葛藤について親和性を考えるようになった。そうした中で演劇と地域を捉えている。つまりは、どちらにおいても対話の問題だと思っている。



(友人撮影 2016年 高校3年生 演劇部の発表大会で脚本奨励賞を貰った筆者)

1-3 「城崎にて」

卒業論文執筆にあたり、文化芸術と地域社会の在り方について考察するに際し、調査対象地に選定したのは、兵庫県豊岡市である。兵庫県豊岡市では2019年から先述の平田オリザ氏をフェスティバルディレクターとして「豊岡演劇祭」が開催されている。2019年の「第0回豊岡演劇祭」と2020年の「第1回豊岡演劇祭」の両方に観客として足を運んだ。第1回での豊岡市内での広域的な演劇的な広がりと言及する前に、その第0回から1回にかけての変化を描き出すため、また0回観劇時に感じた「卒業論文で語るべきだ」という直感を持ったその様子について触れておく。

東京は新宿から夜行バスで12時間。平田オリザが主宰する劇団・青年団を移転してまで、やりたいのが「豊岡演劇祭」なのか、と、城崎温泉駅に降り立った。金曜の朝に城崎温泉に到着したが、メインの演劇プログラムは金曜の19時からだ。第0回の開催という控えめな0回という名前からも見受けられるように、「来年からやってやるぞ」という意気込みのあるいわば前哨戦のような演劇祭であった。規模感にしても、豊岡市全体での地域を挙げた取り組みという形式は感じられなく、豊岡市の中でも既に観光客を得ている城崎地域と出石地域の会場のみであった。この2地域については後述するが、豊岡市の中でも“地域的な自発”によって地域運用が行われる傾向にあり、地域の風土として“外から来た者”への反応

が良くも悪くも大きい地域である。豊岡演劇祭という新しい試みを地域に受け入れさせるための試作としてこの2会場は有効であった、ように当時は感じた。地域住民と思われる普段、現代演劇を観劇しない一般客層の会場入りも多く年配の方や小学生などの地域住民が多く見受けられた。演劇・平田オリザ・青年団・演劇祭ファンと思われる観客は多くが劇場内では関西弁を話し、すこしばかりのアウェイ感を覚えた。城崎温泉の旅館での滞在は金曜の夜から日曜の朝までの2泊3日、お芝居を観る金曜の夜と土曜の夜以外は城崎温泉の外湯巡りと豊岡市街地を散策して過ごした。土曜の夜には地元放送局から、「東京から豊岡演劇祭を一人で観劇しに来る男子大学生」というコピーで取材を受けた。地元メディアが県民に（市民に）メディアとして男子大学生に代弁させ切り取り伝えたかったことは「演劇って結局、魅力的なの？」ということだろう。宿泊した旅館は若女将の、文化芸術への理解から、「豊岡演劇祭パック」という宿泊プランを設定していた。私もその利用者であり、その中でも取材を受けてくれそうで印象の良い学生として、選ばれた。自身への取材の中で、地域に伝えられるべき・住民の知りたいことは「東京の男子学生がわざわざ、演劇を観に来たけど、他にもそういう需要はあるのか。」ということだろう。「演劇が好きで城崎温泉に来た。演劇が無ければ一人でわざわざ来なかったと思う。温泉に入りながら面白い演劇のことを考えることができ、演劇のことも温泉のことももっと好きになった。来年からは第1回ということで本格的に豊岡市内様々なところで演劇が行われると聞いている、是非来年も遊びに来て、演劇のことも豊岡市のことももっと好きになれたらと思う。」その回答通り、豊岡市にはその翌年に来ることにはなる。しかし、希望的観測のように簡単に地域のことを好きになるのは難しい。地域に新しい文化芸術の波、にひきつれてやってきた卒論を執筆しに来た男子大学生という外からの文脈は、そう簡単に地域に馴染むことはない。あんなにも簡単にコロナウイルスは人々と地域の隔たりを越えていくが、人と人の隔たりが真に越えられない限り文化芸術は人々に響かない。

さて、本項の題には、小説家志賀直哉の名作「城の崎にて」のタイトルそのものを引っ張ってきた。文豪らが城崎温泉の湯につかりながら、数多くの名作を生み出してきたように、城崎という地域で、令和は豊岡で数多くの演劇作品が生まれ人々を豊かにするはずだと強く願い2019年は城崎滞在を終えた。



(筆者撮影 2019年 第0回豊岡演劇祭観劇時 城崎温泉街にて)

1-4「地域介入をエッセイでレポートすること」

さてここまで執筆にあたった基本的な問題関心と、豊岡という土地への魅力的な要素について軽く触れてきた。今回、私は既に実践の通りこの卒業論文を、エッセイという手法で豊岡という地域の文化芸術との関わりについて描こうと思う。いわば、一人称視点のドキュメンタリーとして現状の2020年に確かに感じる事ができた、豊岡の「演劇とまちづくり」への変容の様態をライティングできればと思う。残念ながら、豊岡はいまだ文化芸術が“進んだ”地域ではない。様々な先行研究で理想的に述べられる、“文化芸術によってシビックプライドの醸成した、地域的解決能力の潜在する”地域にはいまだなっていない。しかし、そのようなポジティブな変容のキッカケが、豊岡演劇祭という起点から、あろうとしているまさに今その時である。その地域変容が起きている最中、ただの観光客(2019年)から、2020年の三週間弱にわたる滞在を経て「地域(豊岡)のことを少し真剣に考える」大学生になった私自身の視点で、その変容の実態と展望について語ることは大変意義のあることである。文化構想学部の学部生として地域社会のことを専門に考え、人生の糧としてこれから演劇・芝居の道に進もうとしている今まさに私が、演劇と地域社会について感じ議論すべきことを成果として残しておく作業にこそ意味がある。いってしまえば、兵庫県豊岡という地域とわたしとは何にも関係はない。地域で交流をもった人々と、再び会うかどうかはわからない。しかし、滞在を通じ、私は文化芸術と地域について考える者さながら、豊岡のことを考える者にもなった。あくまで第三者として、豊岡にとっては異質な者としての語り口が、地域に新しい視座をもたらし、人々の望むべき豊かな交流の一端となればと思う。ある地域にアーティストがやって来て、その土地の様々な要素を創作の糧にする。そうしてその地域

から生まれた作品が、世界中に伝播しその地域の魅力そのものになり、その地域を発信していく。第三者の“面白い人”＝異質な人（アーティスト）の地域介入が地域へのポジティブな変化になりうることを信じるために、私もまた豊岡に向かったのである。

2 地域と文化資本問題

【2章概略】

本論エッセイの前提条件となる（文化資本論）、基本概念と調査対象地の基本データに触れる。

ピエール・ブルデューの文化資本論を基に、劇作家・平田オリザの文化の自己決定力という概念がある。これは、地域が自主性を持ちその地域課題解決に臨むことができるかどうかの概念だ。この文化の自己決定の醸成には、自らの地域へのシビックプライドを持ち“センス良く”乗り越えることが不可欠だという。しかし、このセンス（=文化資本）の格差は地域レベルで国内では大きく広がっている。(2-1) そこで地域を盛り上げる手段として、かつてから地域に取り入れられているのは、文化芸術によるまちおこしである。中でも、地域介入をしたうえでの創作と発表（アーティストインレジデンス）は、その地域の独自の魅力を引き出し、作品に昇華されるという点で注目されてきた。地域住民が生活していただけでは、気づけなかった、その地域の魅力が引き出される好契機である。(2-2) とりわけ、2020年に第一回を迎えた兵庫県豊岡市の、豊岡演劇祭は、地域の教育や交通課題なども包括的に視野にいった、政策としての地域演劇祭の好事例である。未だ発達途中であり、その演劇祭の是非や地域変容については詳しく論述できないが、人々の意識変容について様々な変化があった。特に、コロナ禍では、文化イベントや観光客の来場に関して否定的な声も多く、一筋縄ではいかない現状がある。(2-3)

本章では3章以降の議論の明確化のため、資本の概念（ピエール・ブルデュー）と文化の自己決定能力（平田オリザ）の概念をメインに指摘する。今回取り上げる「演劇祭」という取り組みが、広範にアートマネジメントの文脈やアーティストの文脈においてどのような位置づけであるか確認し、個別具体例的な豊岡の議論へと発展させる。

2-1 地方地域における文化資本とその格差

本論考での中核となる議論はいずれも豊岡演劇祭のフェスティバルディレクターである平田オリザの著作からの議論が主である。豊岡演劇祭における文化芸術への地域変容がどのような政策的意図を持ち、アーティストである平田が行政に介入しているのかという文脈を明らかにしていく。また、前提となる議論として平田の考えについて触れるべき箇所が多く含まれていることにも注意されたい。

2-1-1 ピエール・ブルデューの文化資本論

平田は著書の中で2020年入試制度改革の文脈から次のように文化資本（ピエール・ブルデュー）について指摘する。

身体的文化資本を「センス」と言ってしまうと身も蓋もないが、「さまざま人々とうまくやっていく力」と言い換えることができる。身体的文化資本を育てていくためには

「本物」「いいもの」に多く触れさせる以外に方法がない。特に、演劇やダンス、パフォーマンスアートは、東京の子供たちが圧倒的に有利ということになる。インターネットの普及で、逆に「生」でしか見られないことの優位性が強調される。地方都市ほど、公的な支援がなければ身体的文化資本の差が広がりやすい。2020年からの大学入試改革は、この努力と無関係の身体的文化資本を問うことになり、より格差が広がる（平田オリザ,2020, pp88-98）。

平田は近年の著作の中で同様の指摘を幾度となくしてきた。上記の最新の指摘は、平田が豊岡市に2021年度設置予定であった（平田が執筆当時は文科省の認可が下りていなかった。）兵庫県立の演劇と観光の職業大学での取り組みを視座にいったことは間違いない。大阪大学の特命教授のときは大阪大学の演劇コミュニケーションの入試を、四国学院大学の教授のときは四国での取り組みについて語ってきた。いつのときも、子供たちの中には、それまでにどれだけ文化的なるものに触れてきたかによって文化資本の格差が生まれ、それによって学歴（制度化された文化資本）などに影響してしまうということである。このブルデューの言うところの再生産については以下の引用からも説明できる。

教育分野において万能薬は存在しないのだ。児童の学校外経験は学校内の教育内容に影響を与え得る。たとえば、学校・国内旅行を含めて文化的活動を頻繁にするのは両親大卒層なので、「夏休みどこに行った？」という児童間の会話の内容であるとか、社会科や外国語の授業内における（学校外）経験の共有やその他社会化の全般的なプロセスについても、個人間・学校間で格差がある。学校をコミュニティに開くといった議論もされ始めて久しいが、地域によって住民の学歴と職業の構成が異なる以上、職業体験や地元の「名士」による講演会の中身は大きく変わるだろう。これでは、近隣の大人たちをロールモデルにすることで、地域SESを子供たちに継承させてしまう。（松岡亮二,2019,pp264-6）。

さらにこの文化資本の考え方については、平田も著書で引用している通り、内田の解説が分かりやすく、ここでの「文化の自己決定能力」での議論に近いので少々長い引用する。

フランスは「階級」社会ではないが、「階層」社会である。そして、階層と階層の間には乗り越えることのできない「壁」がある。その「壁」は社会的地位や資産や権力や情報や学歴など、多様な要素によって構築されているが、ある階層に属する人間と別の階層に属する人間を決定的に隔てているのは「文化資本」(capital culturel)の格差である。「文化資本」には、「家庭」において獲得された趣味や教養やマナーと、「学校」において学習して獲得された知識、技能、感性の二種類がある。家のギャラリーでセザ

ンヌや池大雅を見なれて育ったので「なんでも鑑定眼」が身についたというようなのは、気が付いたら「身につけてしまっていた」という意味で、「身体化された文化資本」と呼ばれる。

もちろん成長したあとからの、後天的な努力によっても文化資本は獲得される。学歴、資格、人脈、信用のようなものがそれにあたる。それは「制度化された文化資本」と呼ばれる。「身体化している」とまではいえないけど、かたちを持たず「持ち運び可能」なものである。

「家庭」で習得した文化資本と、「学校」で習得した文化資本の差はこの「ゆとり」、あるいは「屈託のなさ」のうちにある。その「ゆとり」は何よりもまず「無防備」というかたちをとる。ブルデューの卓抜な喩えを借りて言えば、「血統による文化貴族」は自分の観た映画に出てきた俳優の役名を記憶し、「学校による文化貴族」は自分がみたことのない映画の名前を記憶する。前者は「経験」をたいせつにし、後者は「知識」を「経験」に優先させる。このように、「知識」を語る人間が「経験」を語る人間に対してつねにある種の「気おくれ」を覚えることは事実である。そんなことを意図しないで、自然に振舞っている人間に「気圧される」こと、自分の感覚や判断に迷いを感じてしまうこと、自分がどこかで「いてはならない場所に踏み込んだ」のような共感を覚えてしまうこと、この微妙な「場違い」感のうちに文化資本の差異は棲まっている。

階層社会では、それぞれの階層が「棲み分け」をしていて、住むところも、出入りするところも、食べるものも、着るものも、つきあう人も話題も、交差することがない。例えば、パリには巨大な「郊外」（バンリュウ）と呼ばれる地域が広がっている。このパリの郊外は、「芸術の都」からわずか十数キロしか離れていないにも関わらず、文化的に巨大な「壁」によって隔絶されている。「郊外」には文化的なものがほとんどない。住民たちの身の回りには文化的なリソースを提供する場所がほとんど何もない。だから、「郊外」に生まれた子どもは、たとえどれほど潜在的に優れた知性や感受性に恵まれていても、古典に親しんだり、優れた芸術作品に触れたりするチャンスそのものを構造的に奪われているのである。文化資本の多寡によって階層化されているフランスのような社会において、このハンディは致命的である。

ブルデューが指摘していたように、文化資本の逆説とは、「それを身につけよう」という志向を持つこと自体が、つまり、文化資本を手にして社会階層を上昇しようという動機付けそのものが、彼が触れるものすべてを「非文化的なもの」に変質させてしまうということにある。「文化資本を獲得するために努力する」というみぶりそのものが、文化資本の偏在によって階層化された社会では「文化的貴族」へのドアを閉じてしまう（内田樹,2008,pp20-35）。

上記の内田の引用で強調しておきたいのは、文化資本はそれを身体的なものへと獲得しようとした段階で既に“負けている”ということだ。つまり、身体的な文化的センスは生

まれた地域や階層、家庭の経済資本等によって既に規定されているものであるということだ。更に次項の平田の概念では、その格差が、文化の集積度によって広がっているということだ。つまり、都市なるところに住んでいた方が文化資本については現状の日本では有利になってしまっている。しかし文化資本が少ないがあまり、文化の自己決定能力が失われ、経済力の弱い地域はより大きい資本に潰されてしまうということが述べられる。

2-1-2 平田オリザの文化の自己決定論

劇作家の平田オリザを前項で触れた、身体的文化資本の問題を地方創生の議論に結びつけ、「文化の自己決定能力」というキーワードで説明している。

自分の愛するものは何か、自分たちの誇りに思う文化や自然は何か、そして、そこにはどんな付加価値をつけられれば、よそから来てくれるかを自分たちで判断できる能力がなければ、地方はあっけなく中央資本に収奪されていくのだ。私はこのような能力を、「文化の自己決定能力」と呼んできた。

現代社会は、資本家が労働者を鞭打って搾取するような時代ではない。巨大資本は、もっと巧妙に、文化的に搾取を行っていく。「文化の自己決定能力」を持たずに、付加価値を生み出せない地域は、簡単に東京資本（あるいはグローバル資本）に騙されてしまう。

では、その能力は、どのようにして育つのだろう。それは畢竟、小さな頃から、本物の文化芸術に触れていくことからしか育たないと私は思う（平田オリザ,2013,pp98-100）。

ここでの平田の指摘は、舞台芸術などの文化的な表現が、が東京をはじめとする大都市圏に集中していることにより、“センス良く”地域の問題を解決する手だてが地方で育たないという指摘である。文化的な産業が都市に集中していることそのものが問題ではない。地域の様々なステークホルダーらが、地域の問題に直面したとき、その問題の何が問題で、それをどう解決するべきなのか（文化の自己決定能力）が育たないということが重要な問題なのだ。

2-2 自治体の地域づくりと文化芸術

地域にとっていまや文化芸術を用いて地域振興をすることは普遍的な手法になりつつある。今回取り上げる兵庫県豊岡市においても、地域創生という議論から見れば、“アートを用いた街づくり”の事例のひとつであろう。ここでは地域と文化芸術との在り方を複数の引用から再度見つめなおしておきたい。しかしながら、地域で暮らす人々にとっては、“演劇や劇場を起点にした地域活性化”という感覚ではなく、ただ「演劇の人がまちにやってきて

いるな」程の感覚と、地域における受け入れ方であることは強調したい。

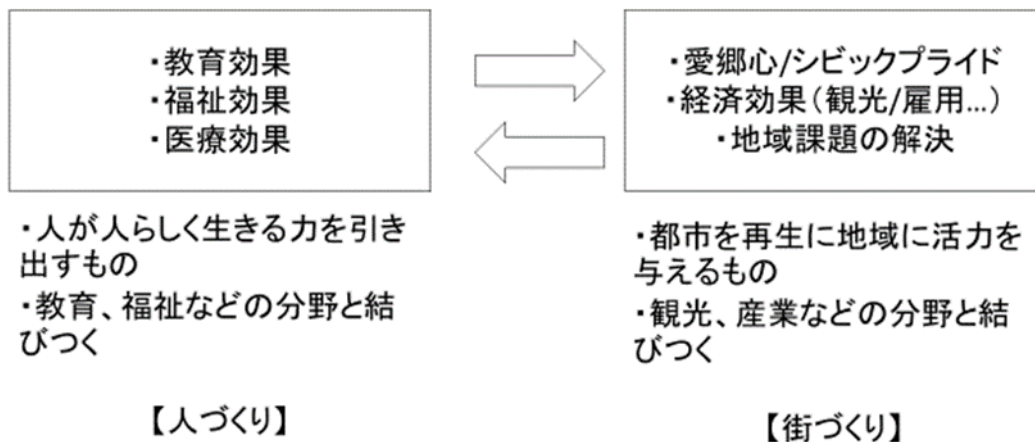
自治体政府が、芸術文化をはじめとする文化政策を展開する根拠は、それが自治体政府の立地基盤である地域や都市の生活文化の基層を豊かにすること、そして地域・都市アイデンティティ形成を刺激するからである。都市や地域社会（コミュニティ）は、アイデンティティがなければ衰退し荒廃する。地域社会におけるアイデンティティ形成過程は地域力を高める。一人ひとりの市民にとって誇りの持てるまち、住み続けたいと思えるまちにしていくために、現在の都市経営思想において文化の視点だけでなく、将来を見越した文化戦略を構築する必要がある。（中川幾郎,2009,pp260-261）

上記での中川の説明は本エッセイで取り上げる、豊岡の事例にも当てはまる部分がある。市民ひとりひとりの誇りの持てるまちへ、という方向付けと、演劇という他者や他者らの多様性を媒介する芸術表現の親和性は高い。また、古賀は下記の引用で人づくりという本エッセイでも指摘される、「面白い人”や”センスのある人”の話題に大きく関わる。

芸術文化と地域づくりの関係には二つの側面がある。一つは、人々の生き甲斐や生活の質の向上に貢献する場面である。教育や福祉、医療など、人々の生活に身近な領域に芸術文化が、働きかけることで、生きる力を育み、よりよい生を送ることができるようになる。芸術文化のこうした作用は「人づくり」に貢献するものといえるだろう。

もう一つは、人々が暮らす地域や都市のレベルで、芸術文化によって課題解決が図られ、経済効果をもたらされるなどの場面である。大きな地域全体に及ぶ観光客誘致の目玉としての文化施設の設置、さらには産業構造の変化から停滞気味であった都市全体の再活性化に芸術文化の創造性を活用しようという「創造都市（クリエイティブシティ）」理論の実践なども大都市中心にみられるようになっている。芸術文化のこのような動きは「街づくり」に作用している。

「人づくり」と「街づくり」、両方を合わせて芸術文化と「地域づくり」の関係が明らかにされる。アートイベントの開催や文化施設の建設でまちが活性化するものではなく、その地域で暮らす人々が地域への愛着やほこりを胸に、地域のあるべき姿を真剣に語り合い行動することこそ重要であり、そのために、人々が創造性を発揮できるような土壌を芸術文化でつくることが求められているのである。（古賀弥生,2020,pp8-9）



☆人づくりと街づくり、両方あわせて「地域づくり」☆

(図-1 「地域づくり」と文化芸術の関係性)

出典 古賀弥生, 『芸術文化と地域づくり～アートで人とまちをシェア～』,九州大学出版会,2020,p8

2-2-1 アーティストインレジデンス

取り上げる兵庫県豊岡市の事例では、「アーティスト・イン・レジデンス」つまりは、芸術家が滞在し創作活動するという特徴が、地域内での演劇集団を溶け込ませる大きな要因となっている。まちで、宿泊滞在を通じた創作活動をさせることで、アーティストらが地域を、“豊かな場所”として認める作用が大きい。

地方に滞在して創作活動するアーティスト・イン・レジデンス（AIR）も活発になってきた。欧米では長い歴史を持ち、日本でも絵画や彫刻を中心に普及してきたが、演劇関連のAIRが近年目立つ。14年に兵庫県豊岡市が事業化良好とした城崎国際アートセンター（平田オリザ芸術監督）が規模や構想の大きさ、創設時に日本劇作家協会のメイン会場として豊岡大会を同センターで行ったこともあって演劇界の脚光を浴びている。豊岡市は野生コウノトリ生息地、志賀直哉が滞在・執筆した城崎温泉で知られるが、ここも人口は約8万人の小都市である。会議・研修施設だった旧城崎大会議室をリノベーションして最大六千人収容のホールのあるAIR施設に模様替え、6つのスタジオ、22人まで宿泊できるレジデンスなどを宿泊料、ホール・スタジオ使用料無料、24時間利用できる施設を持つ。豊岡市に「コウノトリの町」に加えて「アーティストのいるまち「城之崎から、世界へ発信」を主唱、芸術大学誘致までに乗り出すなど市をあげてサポートしている。（森洋三,2018 『2018 演劇年鑑』日本演劇協会編,pp29-31）

今回の豊岡演劇祭でのアーティストの参加にも、宿泊を伴う創作活動が行われた。その中で滞在の記録ドキュメントとして下記のようなやり取りが参加した劇団「マームとジプシー」の滞在記録作品として公開されていた。

「はあ、緊張するね」

「え、石拾うだけだよ？」

「違うよ、ここから始まるんだよ」

日が傾きかけたころになって、俳優の「皆」がふたたび出かけてゆく。『てんとてん』には舞台上にテントが置かれていて、それを固定するための石や、そのまわりに配置する落ち葉や小枝を、上演のたびに劇場のまわりを歩き、探してくるのだ。

「いつか褒められたらどうする？ 『マームの葉っぱの感じがよかった』って」

「山のプロミたいな人から、『これはどこどこの山の風景のようだ』ってね」

「でもさ、このあたりはかなり山が多いだろうから、皆さんの想像はつながるだろうね」山裾を歩いていると、原っぱのような場所に出た。そこには鹿のフンがあちこちに落ちていた。このあたりの山には鹿だけでなく、猪や猿、それに熊も棲息しているらしかった。

(橋本倫史, マームとジプシー「てんとてん〜」2020年 ドキュメント DAY1-DAY7 DAY 2)

作品作りと作品公開に合わせた城崎アートセンターでの滞在の中でのライティングであり、インタビュー記事ではないため、直接的な”城崎での創作活動”そのものではないかもしれない。しかし、上記から受け取れる、城崎での地域に溶け込んだ創作活動の様子が描かれている、創作活動の中、城崎ならではの土地のもの(ここでは、舞台で使われる落ち葉や石)を探し、それを表現活動に落としこむ。その過程では、地域の(城崎の)人々に観てもらい、という視点がついてまわる城崎のひとたちにとってはなんでもない葉っぱは、アーティストらによって、舞台作品の一部となり新たな価値が付与される。アーティストらも、そのことについて、いつかは誇りをもって作品が褒められるのではないか、という期待を胸にやりとりが行われたのだ。

2-3 兵庫県豊岡市の豊岡演劇祭の取り組み

2-3-1 兵庫県豊岡市概略

豊岡市は、平成17年4月1日、兵庫県の北東部に位置する1市5町(豊岡市、城崎町、竹野町、日高町、出石町、但東町)が合併してできたまちである。北は日本海、東は京都府に接し、中央部には母なる川・円山川が悠々と流れ、海岸部は山陰海岸国立公園、山岳部は氷ノ山後山那岐山国定公園に指定され、多彩な四季を織りなす自然環境に恵まれている。平成17年9月には、国指定の特別天然記念物・コウノトリが自然放鳥され、人里で野生復

帰を目指す取組みが始まった。産業は、農林水産業、観光業などが盛んで、特に観光業では、全国的に有名な城崎温泉をはじめ、西日本屈指の神鍋スキー場、但馬の小京都・出石城下町などを有し、年間の観光客は420万人以上にのぼる。また、地場産業としては、全国の4大産地の一つであるかばんや出石焼などがある。(豊岡市ホームページ)

2-3-2 豊岡演劇祭及び豊岡市の地域交流政策概略

豊岡市は豊岡演劇祭について以下のようなミッションを掲げている。

豊岡市は、コウノトリが象徴する「環境と経済の両立」、KIACでの「世界基準の創造と交流」という稀有な挑戦を重ねています。豊岡演劇祭はより大きな挑戦です。演劇祭という文化的な装置への社会的投資で、より広いエリアの可能性を実現し、持続可能性を高めていく。小さな世界都市・豊岡ならではの大きな挑戦となります。演劇祭の創造面においては、現実との緊張感を保ちつつ人間の多様な可能性を追求し、心に疵を残すことを恐れない、真に自由な挑戦を受け入れる場であり続けます。パフォーマンスは、最も、バーチャルに置き換え難い表現です。その場でしか体験できない挑戦的なライブパフォーマンスが世界から集まる豊岡演劇祭は、演ずる者、観る者のいずれにとっても訪れる価値のある場所となります。演劇祭の運営面では、演劇祭を通じた持続可能なまちづくりに挑戦します。演劇祭に伴う様々な営みをまちづくりの中に位置付け、様々なステークホルダーを呼び込みます。地域の人々による生業としてのプロジェクトを基本に、地域外の企業・組織との協業も視野に、演劇祭に関わる者、さらには豊岡で過ごす全ての人々が喜びを分かち合える演劇祭を、そしてまちづくりにおいては「人を幸せにするスマートコミュニティ」を目指していきます。新たに開校する専門職大学は、豊岡演劇祭の「創造」と「運営」という二つの大きな挑戦から知見を蓄え、人材を育てます。演劇祭とそのプロセスを持った学びの場として市民としての演劇と観光・まちづくりのリテラシーを高め、「深さをもった演劇のまち」として共創の基盤を築きます。創造と運営、二重の挑戦としての豊岡演劇祭が、世界との交流を加速し、そこから地域全体の持続可能性を高める道が開かれるのです。(豊岡市ホームページ)

また平田オリザの言葉では以下のような表現をし、演劇祭やそれにまつわる政策を捉えている。

IターンJターンを呼び込むには教育政策をきちんとしないといけない。そのために市内の中学校で演劇の授業を行っている。但馬の東井義雄先生という教育者が「村を捨てる学力、村を育てる学力」という概念を提唱した。優秀な若者はどんどん外に出ていき村は衰退してしまう。城崎国際アートセンターは、舞台芸術のアーティストインレジデンスに特化している。美術のアーティストインレジデンスのいいところは、作品が残ることである。それに対して、舞台芸術はその舞台が世界中を回ってくれるということである。

城崎のかつての文人墨客の逗留の伝統によるものでもある。劇場法（2012）により、公共ホールが劇場制作に乗り出すようになった。劇場が、公演も教育普及も作品作りもやるようになっていく。豊岡市でも18歳の7割が一回外に出る。大阪や東京での暮らしを経験した子たちが、帰ってきたくなくなるだけの魅力的な町にしなくてはならない。日本で演劇を本格的に教える国公立の大学は一つもなく、これをつくることは演劇界の悲願である。「もし、それができるのなら、豊岡に住んでもいいですよ」というのが兵庫県知事にも伝わって劇団ごと引っ越さなきゃいけなくなった。2021年にできる専門職大学では、授業との連関で演劇祭のボランティアスタッフとなる。演劇祭からすると、優秀な学生ボランティアが最初から確保されているので、相当有利になる（平田オリザ、聞き手=渡邊直樹,2020 ,pp6-11）。

本ドキュメンタリーでは豊岡演劇祭、といっても多様な切り口は見受けられる、イベントは実際に2020の中で感じたことを前提にレポートしていきたい。少々長い引用になったが、前提としての豊岡演劇祭の概略提示のため記述した。



(図 兵庫県豊岡市エリアマップ 第1回豊岡演劇祭ホームページ)

3 地域介入エッセイ本論

【3章概略】

○2020/9/8～24 までの豊岡滞在は多くの、「外からやってきた人たち」との出会いがあった。もちろん、豊岡で生まれ育ち今もなお地域を見ている人々もいたが、“演劇祭”をはじめとする、地域おこしに主体性を持ち、地域変容を面白がっている人々の多くが“外から”来ている人たちだった。外から若くてセンスの良い人々が、それだけやってくる、だけの面白さが豊岡にはある。しかし、皆、地域に昔から住んでいる人たちのことを「もっと面白がればいいのに。」と不満げな語り口で話してくれた。アーティストらは、否が応でも（頼んでもいないのに）地域の魅力を再発見・再定義してくる。その面白い、はずの地域の魅力を受け入れられない理由が少し見えてきた。

一つは、豊岡市というまとまりへの納得感の無さかもしれない。後発で平成の大合併で誕生した、豊岡市は、人口集中度と行政能力の高さからかつての豊岡町からその市名を関している。しかし、実態はそうではない。(3-1) 豊岡市は大交流ビジョンという戦略を打ち出している。しかし、そこで語られる、交流について。地域の人びとはどう感じるのだろうか。コロナ禍になり、人々は新しく流入することへの抵抗すら感じるようになった中での、地域反発は確かにあった。中でも、去年は、永楽館という施設で公演をやった、出石地域の反発が顕著であった。(3-2) しかしながら、2015年にK I A C（城崎国際アートセンター）ができてから時間のたった、城崎地域では、アーティストを受け入れる雰囲気ができはじめているという。(3-3) 地域の外部からの人びとの流入は、その地域の問題を明らかにする。特に目立ったのは、交通の問題である。電車は来ない、代替手段もなく、劇場の周りには魅力的な地域のサポートがないがため、時間を潰せることができない。(3-4) しかしこれから演劇を地域が、豊岡市という枠組みではないかもしれないが、演劇を受け入れシビックプライドを持ちうる可能性を感じる演目が数多くあった。(3-5)

大学4年生の夏の豊岡は、どこかほんの少し寂し気であった。就職活動を終え、免許合宿という夏のイベントを終えた私は、卒業論文の地、兵庫県豊岡市に向かった。卒論題材地という名目のもと、2020年9月の第二週から二週間にわたる豊岡演劇祭の観劇を理由に短期の滞在をすることにした。新型コロナウイルス流行による県境をまたいでの移動制限の風潮はないにしろ、人々の観光目的での移動に対する抵抗感はいまだにぬぐえない状況だ。京都からの豊岡までの移動の、特急電車はまばらで、平日ということもあったが、“お祭り”に向かう者としては物足りなさを思うばかりであった。さて、本章では、豊岡に向かい滞在したときの演劇祭中でのやりとりを描く。「コロナのなかの演劇」の議論は多くの演劇人たちの論考で語られている。私にできることは、「コロナのなかの演劇、を通して見えた、コ

ロナの中での地域」である。地域にアーティストらが介入し、その地域の魅力を再発見し、その土地に新たな付加価値が生まれ、地域の人びとの生活が好転していく。そんな、文化芸術を理解する側の素晴らしい意見は、“コロナによる人と関わることへの恐れを増幅”によって波及することなく、ただ悶々と豊岡の地にまわりついている。演劇のことはよくわからないけど新しい人たちが入ってくるのも賑やかでいいね、は気が付けば、新しい人たちが入ってくるなんて演劇はダメだ、という動きに変わってしまう恐れが目の前にきていた。平田オリザの行政介入の手腕により、演劇を信じる者にとっては待望の、豊岡演劇祭に相まって実現する、“公立の演劇を教える大学”の誕生が目の前まで来ている。ここで演劇という営み自体が地域によって否定されかねない状況について、辛く思うとともに、そうなりかねない実情についても議論していく。私の立場としては、かなり演劇祭や一連の豊岡市の文化及び教育への行政（公金との投入と支援）についてかなりポジティブな視座を持っている。そのことによって、見えてこない批判的な要素もあれば、だからこそ見えた要素もあると考えられる。決して、至極全うなまでに“客観的な”論考とはいえないことはご承知願いたい。



(筆者撮影 豊岡市竹野での滞在を終えて。滞在した部屋を振り替える。)

3-1 実態のない「豊岡」というまとまり

Iさん（ゲストハウスの主人）と 竹野という地域と豊岡という地域。
豊岡演劇祭のための2週間以上にわたる滞在には、昨年宿泊した城崎温泉の旅館では少々値段が高くつく。城崎温泉は外湯めぐりでの観光客の温泉街回遊を基本とした、観光地であるが故、“雰囲気ある”街並みで、その分宿泊には学生としてはつらい値段の滞在になってしまう。2019年の滞在では、二泊三日ということも相まって、折角なら温泉旅館に宿泊しようという想いもあってのことで城崎を選んだ。しかし、地域介入調査という堅苦しい表面上の名目及び、2週間にわたる滞在については、ゲストハウスのような安価で宿泊できるよ

うなところでの生活が必要であった。昨年までの豊岡市のイメージでは、「豊岡での宿泊といえば、城崎温泉」である、という感覚があった。「温泉と演劇は相性が良い」というコメントを平田オリザも昨年していたことだし、泊まる、豊岡市街地やそのほかの宿泊施設の利用というイメージは正直無かった。しかし、インターネットで豊岡市ゲストハウスと検索をかけると、意外なことに城崎温泉の隣駅は竹野に、長期滞在を受け入れているゲストハウスが出てきた。演劇祭観劇のための滞在だと、連絡を取ってみると、快く受け入れてくれた。7月の上旬の話であった。ホームページには、新型コロナ対策対応のため、ドミトリー（同じ部屋を複数の単身宿泊者が利用する形式）の設置を取りやめ、各部屋個室対応をしているのだという記述があった。豊岡演劇祭ではその一義的な目標に、「世界一の演劇の街」にするというモットーが掲げられ、演劇祭運営の目標になっていると対外的なPRを行っている。フランスはアヴィニョン演劇祭のように、世界各国からのレジデンス（宿泊滞在）参加のアーティストを集めようとしている、豊岡演劇祭にもコロナ禍の影響は確かにあった。豊岡演劇祭の開催の、豊岡市が（中貝市長の強い意向で）開催を決断したのは6月の下旬だった。それまでは演劇祭ホームページも2019年の「第0回」のときのままだった。国内の演劇アーティストを呼ぶだけの規模感になってしまう、ということは、豊岡市に（日本国内全ての地域がそうであったが）、海外の文脈を抱えた芸術作品はじめ人間が流入しない（できない）ことでもあった。普段は海外観光客もターゲットにしていることがうかがえるゲストハウスのホームページ、しかしその安価な宿泊場があるのは、豊岡市のメジャーどころに感じる城崎温泉からは電車で10分、日本海に面した一見なにもなさそうな砂浜の近くにあるという。宿からは海がすぐ近いらしい。去年は城崎温泉の近くの円山川（まるやまがわ、豊岡市を南北に流れている）と温泉街を流れる大谿川（おおたにがわ）しか目にしなかったから、海は初めて見るな。温泉と演劇についての親和性については指摘もあって去年、外湯巡りをしながら志賀直哉さながら芝居のアレコレを考えた。今年の滞在のテーマは、海と演劇、かもしれないな。京都から豊岡へ向かう、空席が目立つ特急コウノトリの車内での展望だった。

城崎温泉駅までの京都福知山方面または姫路方面からのJRでの移動に不自由は感じない。しかし、城崎温泉以西のJR本線はなにかと不便なことが多い。同じ豊岡市内でありながら、城崎温泉駅とまりの電車が多い。滞在初日も特急では竹野まで行くことは出来ず、手前の豊岡駅で乗り換え、山陰本線は鈍行で竹野まで向かった。昨年宿泊し、演劇と温泉街で受け入れてくれた少し馴染みのある観光地化された城崎温泉駅を通り過ぎ、一駅は10分竹野まで揺られた。まだ名も知らぬ山中のトンネルを通り過ぎる、宿泊地までの道順や演劇祭の開催予定など、不安なことだらけでついスマートフォンを見てしまう。しかし、電波の届かないトンネルは、ほんの一瞬でもグローバルなネット社会から切り離し、自分を確かに、東京からは遠く兵庫県に在ることを証明する。竹野から幾度となく豊岡駅城崎温泉方面との往来はするのだが、この、ほんの1分ほどのトンネルは、毎日、自身を豊岡に定置してくれた。トンネルを抜け数分で、竹野駅に着く。城崎温泉の観光地整備された駅舎の様態とは

異なり、2両編成のワンマンカーが良く似合う、複線のコンクリート風の駅舎だ。決して観光地の宿泊者で繁栄しているような地域の雰囲気はない。右手には比較的新しめの3階建ての役場、竹野浜に向かう2車線の一本道、セブンティーンアイスの自動販売機、駅舎の方を振り返ると徒歩で駅からそれぞれ目的地に向かうのは自分1人だ。駐輪場に向かい自転車に乗るスーツを着た男性、家族の送迎の車に乗り込む高校生、思ったよりもこの地域に住んでいる人が多いのだな、けれど本当に宿泊施設があるのだろうか、少しばかりの不安を感じつつ日本海の方へと歩いた。

2週間ほどお世話になるゲストハウスだから、良い宿泊者足らねばと緊張していた。到着予定の時刻よりも少しだけ早く着いた。ゲストハウスの宣伝通り、徒歩30秒で、竹野浜、日本海が広がっていた。どうやら夏釣りのシーズンやサーフィンの季節に少し被っていたようで、9月中旬の日本海は少しだけ観光客の姿もあった。どうやら、単純に人が生活しているだけの住居としての地域ではないらしい。宿はIさん夫婦が2人で経営するゲストハウスであることが分かった。

「お芝居はどうやって観に行かれます？—城崎、豊岡、江原、がメインなので電車ですかね。電車だと本数少ないので気を付けてくださいね。あと、お芝居見終わってから夜遅くなるときも気にせずゆっくり楽しんでください。—ありがとうございます。」

豊岡に来て初めて、この土地での生活を、社会経済活動をしている人とのやりとりだった。少しでも地域のことを、明るく希望的に豊岡に演劇が流入してくるというポジティブな発想について想いを巡らそうと、素直に感じたひとときであった。しかし、Iさんとのやりとりの起点に、現実はそのままで明るいほど“外からのアーティスト(=演劇創作、演劇祭そのもの)”を受け入れるわけではない。やりとりのきっかけは、竹野という地域で宿泊業を営むということと、そしてコロナ禍の中、どう観光産業を盛り立てていくのか、という話からだ。

「やっぱり城崎(地域)の人たちの方が優遇されている感はあるよね。城崎観光協会の力が強くて。コロナが最初に出始めたとき、うち(Iさんの竹野のゲストハウス)は緊急事態宣言のとき4月にすぐ臨時的に休業するって決めたのに。城崎の人たちは市役所に話通してから自分らのトコある程度優遇的に補償してもらってから全面的に休業にしたのよ。もちろん同じように宿泊観光業というか夏と冬のシーズン限定の宿も多いけど竹野に、まとまって、そういう動きがあればいいって話なのかもしれないけど。」

ここで初めて豊岡という行政的なまとまりで地域のことを捉えようとしていたことに気付いた。聞けば、竹野という地域も城崎と同じく宿泊産業のある町で、ゲストハウスの近くには休暇村という宿泊施設の多く立地するエリアがあり、夏季には海を、冬には蟹を楽しむ観光客相手メインに営業しているらしい。ではこのコロナ禍の中で、竹野の宿泊業態の方々はどうしているのだろうか。「元々、年中開けているようなところも多くないし、常連さんだけ

相手に仕事しているようなところもあるから、そんなに影響ないみたいかも。」というIさんの返答には、少しのやるせなさを感じた。そのやるせなさを私への伝播は、ほぼ初対面の地域介入をしている、豊岡ほぼはじめての学生に対して真摯に対応してくれたことへの優しさ、Iさんの宿泊業としての地域への思いやりなのだと思う。いわゆる「平成の大合併」を機に、現行の豊岡市の行政区分になった。それまでは豊岡市、城崎町、竹野町、日高町、出石町、但東町の6つの地区に分かれており、それぞれの地域毎に地域介入した際の現状を捉えていく必要があるという視座にも繋がるやり取りだった。

“豊岡”での演劇祭に興味を持ってやってきた自身にとって、豊岡は去年訪れた城崎も出石も今年来ている竹野も、同じ豊岡のくりに収まっているように感じていた。しかし、旧行政区分と今の区分は区分が変わっただけで、そこに対する人々の意識が変容しているわけではない。そこに演劇という新たな文脈が、豊岡という地域を新しい枠組みに広く浸透させ新たなシビックプライドに繋げていきたいと行政が考えているのも事実だろう。豊岡演劇祭という名前に引っ張られて、豊岡というくりについて希望的に捉えていたことは確かにあった。それぞれの地域についての、他の地域との考え方の違いが、行政区分的には即していないということもある。それは、公金の使われ方についての疑問にも要因があることは想像できる。“新しく”竹野に入ってきたIさんも、なんとなく竹野は優遇されていない感があることは話してくれた。平成の大合併後、ながら、若くして豊岡に移住してきたIさんは竹野という地域には想いが大きいことが伺えた。海が見える地域を選び移住してきたと語ってくれた。決して豊岡や竹野や兵庫県が好きだったというわけでは無いらしい。地方の海が見えるところで何かをしたいと移住してきた。それが偶然竹野という土地で、様々な偶然とめぐり合わせと行動力で、今は家族が暮らしていけるだけのゲストハウス経営になっている。その地域の中での社会活動の中で、根付く意識は豊岡ではなく竹野町という地域での枠組みなように感じた。

豊岡演劇祭の諸取り組みでもこの行政区分が様々な要素として関与している。まず豊岡演劇祭のシンボルマークにも6つのモチーフの横ラインが入っている。さらには先述の豊岡演劇祭計画のマップには6つの地域をそのまま6つのエリアと表記し、それぞれのエリアでこういう地域で演劇を開催しますよということを強調している。しかし、実際にはコロナ禍の中、会場選定等で折り合いがつかなく、開催実施には至らなかったエリアもあった。豊岡という地域の中で、自身らの税金をどのように使われるかという問題は複雑に諸問題が絡み合う。住民の生活と密接に関係する地域自治体について議論されるなかで重要なトピックに挙げられる問題はやはり、行政の対象、ということだろう。どの活動に住民らの支払う税金が使われ、自身の生活に還元されるのか、どの住民にとってもそれは注視したいものである。演劇に問わず文化芸術について、公金と投入することは市民から理解を得にくい。それは国民意識といってしまうと投げやりなのだが、芸術によるシビックプライド醸成の意識的な取り組みが経過している地域を除くと、国内どの地域にも指摘されることである。こと今年度については、コロナ禍という前例のないほど、“人々の移動と集合”に対する感

情が地域住民にとって激しく動いた時期であった。豊岡演劇祭という取り組みで、自分の知らない地域からわざわざ演劇をしにくるアーティストがいて、それを観に来るファンが全国からやってくるらしい、しかし、自分たちが毎年楽しみにしてきた盆踊りは“密を避けるため”に中止になる。そこに地域住民らが反対や懐疑的な想いを持つのは当然のことである。税金がどのように使われるのか、住民生活レベルベースだけで語られる問題にすぎず、それは行政つまりは政治的な意図も絡んでくる。豊岡というくくりで演劇祭が取り組めるのは、豊岡という市のレベルでの公金と職員の投入が可能である為であるし、それを実現できるのが市長のガバナンスの力でもあるだろう。いま、豊岡は、演劇祭という新しい文脈の流入と、コロナ禍の抱えるそもそもの“演劇と、演者観客の集合の相性の悪さ”の両方を抱えながら地域に新たな可能性を見出している最中である。

さて、この節の最後に、次の議論とつながる、Iさんからの次のMさんの紹介経緯について触れる。Iさんは豊岡について、演劇について考える筆者に「よければこの人、すごく真剣に豊岡、っていう地域について考えていて、演劇祭実行委員の人だから話聞いてもいいと思う。」と紹介してくれた。さらに、地域の複雑さ、こと文化芸術の取り組みの難しさについて語りたい。



(筆者撮影 竹野の宿から竹野浜に向けて)

3-2 “大交流”は可能かー「文化的センス」とアーティストら地域介入

Mさん（地域おこし協力隊 演劇祭運営委員会）

そういつてIさんがMさんを紹介するのに使ったのは、Mさんのフェイスブックの投稿だった。Mさんの演劇祭に関する自身の取り組みのポストに対し、演劇祭を否定的にとらえるコメントが来た。要約すると「地域住民はクラスターリスクのあるイベントはしてほしくないと思っている人もいます。もちろん平時であれば歓迎なのですが。」という旨である。地域の難しさはこのコメントにある。いくら、アーティストやお客さんが来るからと言って、彼らには伝えることに関しては少々難しい。けれど、外から来るものを呼ぼうとしている人々というのも地域に介入するのは間違いないことで、その者は意外と簡単に連絡を取り、伝えられてしまう。

「わたしのところには何件も似たような連絡が来る。直接市役所とかに抗議しているような人たちもいるけど、私に電話とかSNSとかで伝えてくるのは、みんな、親切心、やさしさのつもりで、演劇祭やめたほうがいいんじゃない？って伝えてくれるの。」

金岡くんは演劇祭で豊岡に来てどう思った？素直に。一ああ、なんか思ったより盛り上がってないかなって。勝手なイメージですけど、もっと市内（豊岡駅周辺）とかで大々的に宣伝があったり、するのかなって。演劇祭、お祭り、の雰囲気がないかな。

そのやり取りから、Mさんは、ある種お客さんとしてではなく、筆者を豊岡の参与者として、その地域の中で新しい取り組みに参加していくこと、それに関わりながら暮らすことの難しさと楽しさを語ってくれた。平時であれば本当に豊岡演劇祭は豊岡を代表するその年の大きなイベントごとになれたかどうかということが疑問に残る。コロナ禍の最中、人を求心する力の持つ舞台芸術との相性の悪さから、盛り上がるに盛り上がれない雰囲気の中演劇祭運営が行われたことは事実だろう。しかし、平時であったとして、特に演劇という“よくわからない人たち”が集まってなにかをするという営み自体、否定的な文脈で語られる可能性は大きい。江原駅から徒歩数分、メイン会場の一つである江原河畔劇場近くのフェスティバル実行委員会内での、Mさんとのやりとりは、外からやってくる人たちと地域住民との交流というテーマに及んだ。

私たちは、「観光」を「交流」と捉え直しました。観光は、そこに訪れる人々が、その地の人びと・自然・歴史・伝統・生活文化等々様々な構成要素からなる「まち」そのものと交わる営みです。交流は、対話とコミュニケーションを生み出します。交流によって、豊岡を訪れる人々と豊岡のまちやそこに暮らす人々、豊岡を訪れる人々同士、さらには豊岡の市民同士の対話とコミュニケーションが生まれます。深い交流から、自分自身との対話が始まる可能性があります。観光業は、そのような対話とコミュニケーションが生まれ

る場を提供する産業と言っているかもしれません。(豊岡市環境経済部大交流課,2019)

上記はMさんが、豊岡演劇祭という「交流」の考え方から来る取り組みについて触れた際、渡してくれた資料「豊岡大交流ビジョン 小さな世界都市の実現に向けて」というハンドブックの序文である。ハンドブックは、生産年齢人口の低下の問題性を観光事業と結びつけ、「大交流」(=訪問者を起点にした対話コミュニケーション) 事業の可能性と必要性について説明する。出会いと交流については多くの文化芸術振興と地域創造の観点から語られているが、コロナ禍の最中では、インバウンド狙いやそもそも海外アーティストの誘致志向であった豊岡演劇祭、また豊岡の観光事業について、単に“アーティストが来るから新しい観点が地域に生まれ、それを起点に交流が内部でも促進されるよね”という楽観的な考察は実現可能性が難しい。パフォーマンスや文化交流は人々の対話を促す、ということはハンドブックでは語られないが、序文より前の市長の挨拶に並ぶのは、豊岡市大交流ビジョン策定委員会会長である平田オリザであるから、文化芸術特に演劇に依る対話が取り組みの一部化されることが前提であるの是一目瞭然である。平田は序文挨拶で以下のように述べる。

豊岡の観光には無限の未来があります。そして観光は、おそらく、1市5町が合併してできた豊岡市の強みを、将来にわたって、最もはっきりとした形で住民が実感ができる分野だと私は思います。(中略) これからは、豊岡市民一人一人が芸術家的な感性を持ち、あるいは子供たちにその感性を育て、市内のあらゆる素材に光を当てていくことが求められていくのだと思います。多様性を受け入れ、大きな交を生み出すためには、まず豊岡市の多様性に、市民みずから光をあてるどころから始めなければならない。ここに策定して「大交流ビジョン」がその出発点になれば幸いです。

ハンドブックの中では「豊岡のローカル」という表現で、「ここにしかないもの」に光を当てて魅力あるものとして育てていく重要性を強調している。その中でローカルをグローバルと対比させながら「小さな世界都市」になるべく世界規模感での発信をしていくほかなことが強く示されている。この「小さな世界都市」のための手段として豊岡市は、平田オリザをキーパーソンに置き、平田オリザも兵庫県と豊岡市に「日本初の公立の演劇を学べる大学」を設置してもらうことで対等にお互いの願望を満たしている。演劇祭の開催における海外アーティストのアーティストインレジデンスや、大交流プランでも触れられている、「ローカルとグローバルの掛け合わせ」は、コロナ禍の中成立しうるのだろうか。大交流ビジョンでは、2030年までには下位予測でも2017年度の2.3倍に豊岡市の宿泊者数になるという予測が立てられていたが現実にはそうはいかなくなった。もちろんここで議論されるコロナと観光または演劇という話に対して、コロナ禍以前のデータを持ち出すことの危険性はあるにしろ、グローバルで捉え曲がりなりにも「世界都市」を標榜する自治体になれば少なからず影響はあつただろう。

大交流ビジョンの中でも指摘されていたように、交流には対話が必要である。コミュニケーションベースの議論では対話の重要性や、文化芸術教育の議論でも多くの指摘の通り、観光いわば地域の要素を魅力に置き換え発信していく際には、異なる価値観のすり合わせつまりは対話が重要になってくる。ビジョンでもその議論を前提に、観光産業では自分とは異なる文脈を持った人たちを呼び込むために対話が必要だということが、意図として再三伝わってくる。さて、Mさんとのやりとりの中で覚えた、現状における、地域の取り組みの難しさについて戻ろう。Mさんとのやりとりの中、一番、なんだか落ち込んでしまったことは、フェスティバルセンターにその際、豊岡市に長く住んできている人が1人もいなかったということである。たまたまその場に居合わせなかったのだろうかと思い、聴いたところ、フェスティバルの運営スタッフとして活動する若者は平田オリザの開講する演劇塾の生徒と、豊岡に関与する地域おこし協力隊がほとんどだという。豊岡市は総務省の運営する地域おこし協力隊の積極的採用をしており、数年前から能力の向上心をもった若者が多く流入してきている。前述のIさん、後述の若女将Nさん、そしてMさんと偶然地域おこし協力隊経験者である。今回地域に入って話した方が偶然みな地域おこし協力隊経験者であった。もともと地域にいる人たちの視座が欠けてしまったことについて否めないが、自分の利益と地域の利益の重なる部分の多いに行動力と実現するネットワークを持ち合わせている若者に外部的な要素があるのは事実かもしれないと感じた。Mさんから聞いた想いの中に、地元の「演劇祭について否定的な反応を起こす人たち」への面白みのなさを持っていることを感じた。「せっかく面白くて新しいことやろうとしている人たちがいるのだから、もっと協力的であっても良いのにね。」そう語るMさんはどこか寂し気で、疲れているように見えた。もちろん全てが事実とも限らない。地元住民の中に、つまりは演劇祭に対してネガティブな反応を地域として表出した地域の中にも、街の外から演劇がやってきてお客さんもたくさん来るということに対して好意的な想いを持つものがあるはずだ。しかし、地域の意思決定の中ではその反応が表出しづらい構造があり、その者にとっては他の誰が決めた意見が街の意見になりやすい地域でもあるということだ。豊岡市街地の独特なレンガ造りフランス風の都市計画に依拠しているのだよとMさんから街の紹介をされている最中、またMさんの元に知り合いから電話がかかってきた。今週末には、Mさんの大きく関与する演劇祭の“演目と演目との間の時間を潰せる”マーケットが開催される予定だ。電話は、Mさんの取り組みに関しての知人からの、お叱り、の電話だった。何年か経って、演劇祭が、年一度のお祭りとして浸透してきたころには、このまちの人たちにとって“まちにアーティストがいる”のは当たり前になるのだろうか。そうなれば、「東京から豊岡の演劇祭と地域のシビックプライドについて考えています。」と地元の人にも言いやすい雰囲気になっているのだろうか。



(筆者撮影 竹野駅前のマーケット)

3-3 小さな世界都市に向けて—城崎のシビックプライドの形成

Nさん (城崎温泉旅館 若女将)

こと城崎という地域において、Mさんはその町的意思決定に関して「観光協会が王様の王国」、という表現を笑いながら伝えてくれた。城崎は言わずと知れた温泉街で、かの志賀直哉の「城の崎にて」が引き合いに出されるような、街並みの雰囲気統一化の上手くされた様相がある。城崎の町について「誰が城崎の人で誰がお客さんかは全部わかる。城崎の人はお互い全員知り合いだから。誰が誰と仲良くしているのか、みたいなこともお互い監視し合っているみたいな感じ。」そう語るのは、昨年泊まった旅館の若女将Nさんだ。Nさんとは今年の豊岡演劇祭では、宿泊しなかったものの、演劇祭観劇の途中城崎を歩いていると、「去年泊まってくださったかたですよな？」と偶然会うことができた。それぐらい狭い町内だ。

「ああそうです。えーすごいーそんな偶然ですね。」

—「今年も演劇祭観に来ているの？すごいこんなピンクの鞆持っているのは金岡さんだけですよー。」

—「覚えていてくれて嬉しいです。実はなんとなく卒論を豊岡とか城崎とか演劇祭で書こうと想着いて」

Nさんが若女将として旅館経営をしながら、演劇祭のデザイン関係のお手伝いをしていることは去年から伺っていたので、可能ならお話伺おうと思い、酒屋にお遣いに行くNさんを引き留めつつ道端で話をしてみた。好反応で連絡先の交換をしてお互いの話をできることになった。

城崎には2014年から城崎アートセンターがあり、城崎に“外からやってきた変な人”が滞在することには慣れてきたという。城崎アートセンターの方向(温泉街の端、外湯のひとつである鴻の湯(こうのゆ)の向こう)に人が歩くようになったのはアートセンターのお陰ら

しい。確かに、鴻の湯の奥にはこれといった観光スポットはなく、地域住民らが乗る自家用車のための道路かその周辺の少しの住宅しかない。

「アートセンターの方から歩いてくるちょっと変な恰好をして集団でカフェに入ってくる人たちは、“きっとなんかすごい人” なんだろうなどは思う。けど私たち城崎の町の人たちはお芝居とか演劇とか現代ダンスとかそのものことは分からない。だから、町で見かけて声をかけて、なんだかよくわからないけど飲みとかで仲良くなっているうちに、アートセンターに観に行ったら、本当によく分からない最先端のダンスをしていて、スゴイ人だったのか、と後から感覚的に分かることがある。」

一人の演劇ファンとしてはなんて羨ましいことだと感じる話ではあるが、城崎という土地が確かに新たな町の要素として演劇やアーティストインレジデンスを受け入れているということはいかがえる。町がアーティストを受け入れるということは、それぞれの住民が外から来ている人がいるという状態になれるということである。誰が外から来た人で誰がアーティストなのか、そして誰がその人と仲良くなるのか敏感な町だからこそ、誰から仲良くしていたら自分も仲良くしておこうかなという雰囲気になりやすいというのもNさんの指摘だ。

「アーティストの人たちのすごさはこの町でお客さんを受け入れている生活をしている私たちには分からない。けれど、そういう世界に評価されているものを観に来る人たち含めてみんな城崎の温泉を入れてくれて、良いところだねって言ってくれるのが嬉しい。この前来たアーティストの人が、その辺にある岩を見て、「こんな素敵で面白いものはないね」って言っていた。地元の人なんかは生まれた時からある岩だからそんな気にしたことなかったけどね。」

文化芸術とアーティストのもたらす地域の付加価値にまつわるお手本のような発言だ。けれど、この発言が感覚的に地元で生まれた時からいる、Nさんのパートナーから出たということが私は嬉しかった。正直に言えば、卒論の題材になるようなコメントが採れたということもあったのかもしれない。けれど、演劇の持つ力を肌感として、それが演劇の力だとは分からない形で住民らに少しではあるがポジティブな変化が起きていることではあるだろう。

「アートセンターが出来て最初は確かに本当によく分からない人たちがいるなあって思っていたけど、来る人たちと何となく話していくうちに、別に皆普通の人だって、分かっているからは、また次はどんな面白い人が来るのかーというぐらいかな。その辺の地域へのアーティストの介入のさせ方は、田口さん（城崎アートセンター館長）のやり方が上手い

のかな。世界的なアーティストだから今度の公演の小道具貸してよ、みたいな言い方はせずに、今度こういうアーティストの人が来るのだけどこういう小道具持っている人いかな？という感じで連絡をくれる。私たちが手伝って、私たちの城崎の名前を、世界中に連れてってくれる感覚がある。」

あくまでも地域のひとたちを同じ目線で住民らに参与させることで、相互監視的に、あの人が手伝っているなら私も手伝えるよ、と後から付いてくるような地域だとNさんは話す。城崎という互いのことが良く知れた、お客さんと身内とを区別する、けれどお客さんのことは受け入れていく地域のある種「王国的な」雰囲気、館長の対等な姿勢との相性が良い。既に“まちとして”プライド、つまりは城崎温泉という誇りになる産業の中で暮らす文脈に、新たにアーティストやパフォーマンス、そして演劇を観に来るひとたち、という外の人たちが入って来て、シビックプライドが変容していつている最中なのであろう。

「ここ数年で（城崎アートセンターが出来て、アーティストに慣れてきて）良い方向で変わったなと思うことは、良い意味で想像できるようになったことかな。いままでは、例えば、子供らが「演劇を仕事にしたい」って言ったとしたら、「あんたなに？テレビに出る芸能人にでもなるのか？東京の事務所とか入るのはすごく大変だよ。」って返答していたと思うけど変わったかな。アートセンターに来る演劇をやっている人たちは、全然テレビとかでは有名な人じゃないけど、それでもどうやら世界的に評価されているらしくて、お金持ちじゃなさそうけど貧乏でもないから。きっと演劇を仕事にはどうにかできるのだろうなって。それは演劇とかだけじゃなくて、全てにおいてそうだけど。城崎の子供たちは普段から、アートセンターのお芝居見ているから、そういう選択が身近になっていくのだと思う。親もアートセンターでやっているお芝居なら観ておいでーって言うし。だんだんと町に演劇があるのが普通になってきていると思う。城崎はアートセンターのお陰で、演劇祭が毎年になってくれれば、演劇とか自分たちの町が良いところだってことが当たり前になってくるのかもね。」

Nさんのお話伺いながらのランチは極めてポジティブなやり取りで終わった。まだ学生だからとご馳走になってしまった。地元の人しか来ないような洋食屋のハンバーグは観光客も楽しめるものだった。城崎の人にとっては徐々に演劇が当たり前のものになっている。町に対してプライドがあるということは、同時に自分の想像もしない文脈に地域の良さを連れて行ってくれることの受容であり、その演劇を媒介した魅力の発信によってシビックプライドが生まれてくるということでもある。決して演劇の営みだけが崇高で優れているという考えには誰もいたっていない。たとえ地域にどんな脅威が来ようとも、どうにか盛り上げていけなくなったときには、地域のことを考えプライドを持って考えていかなければならないときが来るということである。シビックプライドの醸成中で

あると言える城崎が、では現在コロナ禍という地域にとってかなりの脅威となっている状況の中、そのプライドを懸けて地域と向き合ったかどうかは断言できない。その地域への誇りと、文化の自己決定能力が演劇とアーティストの文脈から派生するものか、はたまた、城崎温泉に演劇がやって来るまえからあったものなのか、断言できるかは分からない。けれど、確かに城崎のひとたちは、アーティストを受け入れ、演劇を観に来る人たちのことをお客さんだとしてくれたことは間違いない。Nさん曰く、演劇祭のお客さんぐらいらしい、ピンクの鞆を持っているような奇抜な恰好をしているのは。



(Nさん撮影 兵庫県立コウノトリの郷公園にて)

3-4 盛り上がっていない感—地域問題の露呈

しかし、演劇祭期間中であつたが決してその盛り上がりに対して、地域の人たちの参加度と大きな観光の効果があつたかどうかは定かではない。むしろ感覚としては、正直に言えば期待外れなところも大きかつた。私自身としては、昨年度から想いを寄せわざわざ2週間も豊岡に滞在するような、暇と熱意のある観客であるから、実の地域とのギャップがあるのは想像の範囲内である。さらにいえば、豊岡市関係者で既にコロナ感染者が1人出ている中（どこの誰であるか私の元にもなんとなく耳に入ってしまうところも地域の狭さの問題もあるが）、多くの観光客や主に関東圏からの外部のスタッフやアーティストを呼び込むイベントに対して、大々的に商店などがそれに乗っかり商売をすることの風評的な難しさもあるだろう。しかしそれにしても、なんとなく、地域が地域のイベントとして、プライドは持たないにしろ、何かの機会として盛り上げていこうとする感覚があつても良かった、のではないだろうかと思うぐらいには、“お祭り”感のない滞在期間であつた。もちろんその良さもある、地域の平時のような雰囲気の中、少しばかり演劇が地域の雰囲気に混ざり、生活の中に確かに存在するパフォーマンス、いわば、日常と非日常の隔たりの感じない演目プログラムであつた、ともいえる。しかしながら、折角の、回遊性の高い（豊岡市内を広域的に一複数の観光名所や商店街の近くを訪問者に通らせながら）イベントであるならば、外からや

ってきた人向けの有効活用がもっとあれば、とは感じた。決して、もっと演劇祭の観光客向けに様々な対応しろ、という話ではなく、それがなかなか追いつけなかった状況、追いつけなかった情勢、気づけなかった期間、のついでに指摘である。

「演劇祭きっかけに、外から人が来ることで、地域の人たちももっと生活しやすくなればいいのだけど。」そうコメントするのはMさんだ。ここで私とMさんが互いに感じた、豊岡の生活面での大きな課題は交通の問題であった。例えば、前述の城崎と竹野の利便性の悪さである。竹野も豊岡演劇祭の演目の会場に選ばれていながら、豊岡駅からのJRでは城崎駅乗り換えになることが多く乗り換えに20分ほど足止めを食うこともある。豊岡市内の観光客以外の交通の便の中心は自家用車である、そのため決して公共交通機関の利便性が高いとはいえない。ましてや、演目プログラムの都合上、交通機関を使うと、最寄り駅についてから開演まで40分以上も特にこれと言って時間を潰すことのできない江原駅前まで途方にくれることになる。そうした演目と演目の時間の間つぶしとして、江原駅前のフェスティバルセンターをオープンカフェとして、演劇公演について誰でも自由に語らう場としての機能を持たせる予定もあったようだが、コロナ禍で上手くいかなかった。観光客の交通利便性の問題は、豊岡市も認知しているようで、昨年、第0回演劇祭からの通年的な取り組みとして、1人乗り用小型電気自動車の無料貸し出しサービスも行っている。自動車運転免許を大学4年生にして初めて取得したので、試しに江原駅から豊岡駅までの10数キロメートルの移動に利用してみたが、晴れていて（小型の為ドアがファスナー、熱がこもると大変なので半開きのまま走行することを推奨される）心地よく運転できた。駅前のベンチや住宅街の公園で電車を待つため時間を潰すことなく移動できたのが良かった。江原駅前にこれといった場所がないということが大きな負担なのではなく、交通機関の時刻と演劇演目の時間設定の問題であり、集客見込みのあるイベントにも関わらず地域との連携が取れず、美味しい地元のご飯屋さんなどの情報が観客に入っていないということが正直大変しんどいものがあった。もちろん知らない土地を散歩がてらその土地の住民や活動について想いを馳せることは好みだが、2週間もいるなかで、演劇観劇が目的の日に上演1時間前に駅に着く電車しかなく、そのまま駅のベンチに座っているということがかなり疲弊させる要因であった。

ゲストハウスのIさんは正直な感想として、演劇祭でこんなに人が集まってくるとは思っていなかった、と語ってくれた。竹野でも浜辺で複数の演目が上演されており、演目のある日には駅の方から何人かそれを目的に歩く人の姿があった。主に竹野に観光で訪れる人の多くは、サーフィンや海水浴など竹野浜をメインにするためくるまでの移動が多いという。また、竹野浜でのパフォーマンスをしていたアーティストらが、夜のバー営業の時間に「ご飯食べられますか」と店に立ち寄ってくれることが複数回あった。竹野には夜ご飯を食べるところがほぼない。生活をしている人たちは竹野で取れる新鮮な魚介類や竹野川の水美味しいお米など、簡単にスーパーマーケットで買い物ができる。しかし、素泊まりとして大会運営委員会から斡旋された竹野の観光ホテルに素泊まりしているアーティストらはその晩御飯についてなかなか良い案が見つからなかったのだ。Iさんは正直、コロナの中グ

トハウス運営をどうしていくかということでは、気が回らなかつたと話してくれた。町をあげて、すこしでも各宿泊施設がなにか、観劇後の観客に販売でもすれば少しの利益にはなつたはず、ということも想像はできる。しかし、終わってみれば、の仮定であつて、演劇を観に竹野の浜に人が夕方に40人も集まるということは想像しにくいものだろう。やってみて、はじめて、演劇は人があつまるのだ、ということが感覚として残るはずである。

観光客を全て受け入れて、地域ぐるみでもてなすことが求められているわけではない。新しい、アーティストらと観客という視座の介入により、地域の抱える交通や飲食店の利便性の問題が露見するということだ。もちろん住民らにとっては現状大きな問題ではないのかもしれない。しかし、公共交通機関が不便でも自家用車で移動すれば済むという問題ではない。車が運転できなくなった際の視座を、新しい文脈が持つて来る、はずだ。



(筆者撮影 竹野駅にて電車を待つ筆者)

3-5 地域が演劇を受け入れる最中—演劇作品と地域との関わり

城崎のこどもらは城崎アートセンターの定期的な公演により、観劇すること、お芝居を座ってみることに身体的に物凄くなれている。演劇祭期間中も、お芝居の始まる前には舞台セットに登場する様々な小道具を見かけては、親に「あのとけいはねー、多分こういう風にかわれるんだよ」と話をする姿が見られた。彼らの面白いところは、それでもお芝居の上演中には喋つてはいけないということを知っていて、興味深そうに舞台上のやり取りを眺める。身体的な慣れ、というものが、ブルデューのいうところの身体的文化資本でありハビトゥスである。一方で竹野のこどもらは、まだお芝居をみるということに慣れていない。豊岡演劇祭の演目の一つに、竹野町一帯を観客に演者ととも街歩きさせ、物語の最後には夕日の沈む竹野浜を背景に楽器に合わせたダンスが行われるというものだ。この演目の特徴は演者及び観客が竹野町の野良猫となり、(観客は配布される猫耳をつけて町を歩くことになる)その追体験と音楽とダンスパフォーマンスを通じて行われるということである。町中でのパフォーマンスということもあり、アーティストにとってはリハーサルなしの一発勝負

だったようだが。子どもたちはじめ住民らは普段生活する町での起こる様子に多くが集まっていた。アーティストと共に猫耳をつけて追体験できる観客は予約した15名に限られたが、観客ではない住民らは構わず、いち“観客として”パフォーマンスを楽しむ。特に演目終盤の浜辺でのクライマックスのダンスの展開の場面には、子供からお年寄りまで老若男女問わず多くの住民がその猫のダンスを見守った。特に印象的だったのは、お年寄りの不思議そうな顔と、子供らの不安そうな顔だった。小さなこどもらは真剣に猫たち（格好をしたダンサーであることはこどもらにも分かる）を見つつも率先して興味があるかのようにふるまう様子はない。親に連れられてきてみたら、なんとなく面白そうなことが起きていて、すごいから見ているぐらいの雰囲気の子供たちであった。地元の高齢者婦人会（この地域では竹野駅前のカフェを存続させるため有志が婦人会を組み運営をしている）のおばあちゃんらが、終演後、猫良かったと和気あいあいとしていて、多くの投げ銭を入れていたことが記憶に残っている。

演劇は、誰かと誰かの身体的対話的なやりとりを観るという行為そのものは、もうダメかもしれない、豊岡に来る前にはすこしだけそんなことを考えていた。コロナ禍のなか、いままで当たり前であった、公演や上演、という形が大きく揺らいでいた。演劇をとともに数年はその面白さを考えていきたいと思っていた私にとって、演劇祭を観客として観に来るといふことにどこか救いを求めている。竹野の浜辺での猫のダンスパフォーマンスは、これから演劇を受け入れていく地域の展望が少しかもしれないが見えたような気がした。きっと、あの竹野のおばあちゃんは、来年も猫が来ないかなと思っているはずだ。きっと来年は猫じゃないよ、ばあちゃん。



(筆者撮影 竹野浜にて公演のパフォーマンスを眺める地域のこどもたち)

4 これからの豊岡と演劇祭への展望

【4章概要】

演劇祭を通じた、地域の課題露見と、それへの対応の難しさについて指摘してきた。演劇という、作品も持ち運びを通じた人々の交流と、それによるシビックプライドの興隆については今後の地域社会にとって明るいことであるはずだ。(4-1) 地域の課題を、センスのある外部的な文化の影響力によって、内発的な課題解決に向かうと信じている。(4-2)

さていくつかの描写を基軸に豊岡演劇祭期間中体験した印象的な、地域と演劇祭についてのエピソードをライティングしてきた。そう簡単には芸術によるシビックプライドの形成という現象は起こりにくい。殊に、演劇という人間そのものの移動がつきまとう表現形態の芸術においては、このコロナ禍の中、なかなか予定していた方法での市民と芸術との関わり方は難しい。けれども豊岡でなら、“小さな世界都市”を標榜し、日本で演劇を観るなら豊岡だよ、と、パリのアヴィニョン演劇祭のようなイベントになる日が必ず来ると希望を胸に、本ドキュメンタリーの最後にしたい。あくまでも地域介入の報告、それからたった一つの地域のことしか捉えられていないということを受け入れながら、それでも豊岡に行って良かった、と思えたプライドを持った者として描く。

4-1 「豊岡にて」はいつ産まれるか—議論の確認

3章で触れたように、豊岡での演劇祭期間が全て満足のいく演劇との、地域との市民との触れ合い方であったとはいえない。そもそも学生の貧乏旅行だから、城崎の美味しい観光地価格の特産品を食べる機会などそう多くなく、予算のほとんどを宿泊費交通費観劇費に充てていた。滞在ある日の22時、観劇帰り例の如く城崎温泉駅で乗り換えのため50分またされながらも竹野駅に向かう車中、トンネルで電波が途切れた。やはり現実に戻る、どんなにスマートフォンで今日見たお芝居の感想などを探そうと、豊岡にいる。その日観た平田オリザのお芝居は妙にはまって、ここ数年観劇した芝居の中で1位2位を争うぐらい良い芝居だったと省みた。電車が竹野に着くといつものように人はまばらで自分1人が駅から歩く。皆は自転車か、いいな。ふと、自分が演劇を江原河畔劇場で観たことに感銘を受けていることにも気が付いた、豊岡で、だ。まだまだ短い人生の中だけど、こんな何にもないような風なところのお芝居で感動し、全く世界から取り残される気がしなかった。世界の話題の中心は、圧倒的にコロナ禍についてで、東京都の感染者数が何人であるかどうかというものはや気にも留めなくなった情報がインターネットには溢れている。確かに、情報や文化の集積地としての東京、ましてや兵庫のお隣大阪には敵わないだろう。しかし、文化的な心理的余裕として、「いま、間違いなく世界で一番の文化的な場にいるかも。」という自信を竹野浜に近づきながら得た。自身が演劇に志を置くものとしてそう思えたことは間違いがないが、ここでの感覚は内田の説明した文化資本論の議論に立ち戻る。「文化資本は文化資本を獲得しようと思った時点で負けなのだ。」という解説で、「演劇的な満足感」はいくつかの説明ができ

る。まずは、演劇を得ようと（文化資本の演劇祭という形での集積地に自ら赴いている）している段階で、自身の文化資本には限界があり、このまま私はいかにも文化的な見た目（ピンクの鞆に派手なダルダルのパンツ）相応なままその文化資本へのコンプレックスを抱えなければならないということ。もう一点は、このまま私がこの感覚を持ち続けられるような地域で豊岡がいてくれれば、豊岡で生まれ、豊岡の生活の中で何かを得ながら育つ若い世代は、この文化的な知見の広さと余裕（文化資本）を持って成長していくことができるということだ。やがていずれは、豊岡で何かをしたいと思った時、豊岡に何か脅威が迫ったときになんとかして豊岡のことを思い、それを実現できるようになる（文化の自己決定能力）ということだ。幸いにも、豊岡の観光専門職大学は名称を芸術文化専門職大学で来年の4月に開学することに決まった。これで大学生が町にいる、若い世代が地域の中で地域と文化芸術のことを志向できる環境が整ってきた。継続的に恒常的に演劇を外からやってくるアーティストを町に馴染ませていく必要がある。コロナ禍でその足取りは少し重くなったかもしれない、けれど着実にひとつひとつの演劇公演を確かに豊岡の地で成功させていくということを祈りたい。

さて、平田が豊岡市に介入するきっかけとなった城崎アートセンター、その標榜には「アーティストを守り育てるまちで、21世紀の『城の崎にて』を創ろう」とある。豊岡演劇祭のなか、豊岡市としての「豊岡にて」が創られるのは難しいかもしれない。けれど、『竹野にて』『但東にて』の名作が生まれることがすぐ目の前まで来ている。確かにそう感じる2020の第一回豊岡演劇祭であった。

4-2 「東京にて」 コンクリートか人かという言説との戦い—アウトロダクション

2020年5月コロナ禍の中、平田オリザの民主党政権内閣参謀関与時代のスローガン「コンクリートから人へ」が再度取り上げられインターネット上で議論を引き起こした。きっかけは、コロナ禍の各種産業の利益落ち込みの中、NHKニュースに出演した際のある発言だ。

「製造業の場合は、景気が回復してきたら増産してたくさん作ってたくさん売ればいいですね。でも私たちはそうはいかないんです。客席には数が限られてますから。製造業の場合は、景気が良くなったらたくさんものを作って売ればある程度損失は回復できる。でも私たちはそうはいかない。」

この発言の切り取りは、ある程度批判的な含意のあるものであった。業種差別的な発言だと、製造業関係者からの強い批判も見受けられた。そんな中、鳩山政権時代の内閣参与のときに提言した「コンクリートからは人へ」というスローガンまでまとめて批判されたのだ。平田本人も業種差別的な意図はなく、舞台芸術関係者への支援を求めるというメッセージであった。幸い、この平田の発言を機に、演劇を始めとするアーティストらへの支援の動きが高まり文化庁の補助金を各種アーティストが申請できる体制が整った。しかし、文化芸術

への支援という問題は、彼らの生活だけの問題に限らない。この国においてはフランスをはじめとする他の文化立国のような雰囲気はまるでなく、国を挙げて公金投入で地域の文化芸術を振興しようという動きにかける。2012年制定の（これも民主党政権下で）「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」いわゆる「劇場法」の効果的な運用をしている自治体は数少ない。文化芸術振興基本法に基づき、端的に言えば公共ホールに劇場制作を置いて運営することになっている。つまりは、劇場がただのハコモノだけではなく、市民に対して芸術を伝播させるために努力しなさい、ということである。劇場を起点に市民に芸術を広めるだけはもちろん全てではない。今回取り上げた、豊岡演劇祭の取り組みも、劇場の効果が大きいながらもそれがすべてではない。この国の生産年齢人口は減少する一方のなか、それぞれの地域がどうシビックプライドを持ち、新自由主義的なグローバリズムと向き合っていくかという問題である。私たちが私たちと誇りと、少しの愛を持ち、地域のことを考え対話していく、そのキッカケの一つに演劇の想像力があるに違いない。文化資本の格差問題は複雑で様々な要因が関わってくる。その解決の根本的な問題は、その格差がもたらす「文化の自己決定能力」であることを何度かしてきた。「コンクリートから人へ」というフレーズの真偽や是非は問わない、しかし、「人へ」という方向性に関しては大いに共感したい。豊岡の人たちが豊岡のことを想うとき、わたしたちがわたしたちの地域を想うとき、間違いなく「人へ」の方向に動いている。東京にて。2020/1/27

に地域の皆がなっていけるような街であり続ける限り、未来は明るい。

4章では視座を豊岡から発展させ、全国の地域自治体への応用と展開について語った。文化資本の地域間格差の是正に、文化芸術の力は大きく作用するだろう。そのためには、行政の力や、第三セクターの活躍、文化芸術支援の法制度なども大きく関与する。

謝辞

論文執筆にあたり、多くの方のお力添えをいただきました。豊岡市への地域介入の際快くお話を伺うことを承諾してくださった皆さんはじめ、様々なひととの出会いとやり取りによって、ドキュメンタリーとして執筆することができました。また、ドキュメンタリー構成を提案してくれた浦野先生、互いに論文執筆を切磋琢磨しあったゼミの同期のみなさん、に感謝申し上げます。

参考文献

- 平田オリザ,『新しい広場をつくる 市民芸術概論綱要』,岩波書店,2013
- 平田オリザ,『22世紀を見る君たちへ これからを生きるための「練習問題」』,講談社,2020
- 平田オリザ,『下り坂をそろそろと下る』,講談社,2016
- 平田オリザ,『わかりあえないことから—コミュニケーション能力とは何か』,講談社,2012
- 平田オリザ・藻谷浩介,『経済成長なき幸福国家論 下り坂ニッポンの歩き方』,毎日新聞出版,2017
- 根木昭・佐藤良子,『公共ホールと劇場・音楽堂法 文化政策の法的根拠Ⅱ』,水曜社,2013
- 松岡亮二,『教育格差一階層・地域・学歴』,ちくま新書,2019
- 内田樹,『街場の現代思想』,文春文庫,2008
- 中川幾郎著,小林真理・片山泰輔監修,『アートマネジメント概論』,水曜社,2009
- 宮島喬,『文化的再生産の社会学—ブルデュー理論からの展開』,藤原書店,1994
- 古賀弥生,『芸術文化と地域づくり～アートで人とまちをシェアに～』,九州大学出版会,2020
- 森洋三,『2018 演劇年鑑』 日本演劇協会編,2018
- 平田オリザ,聞き手=渡邊直樹,「小さな世界都市」豊岡ほど夢と希望のある地域はない,『地域人』57号,大正大学出版会,2020
- 森洋三,『2018 演劇年鑑』,2018,日本演劇協会編
- 豊岡市環境経済部大交流課,「豊岡市大交流ビジョン小さな世界都市の実現に向けて」,2019
豊岡市ホームページ
<https://www.city.toyooka.lg.jp/shisei/shinoshokai/rekishi/1002339.html>
- 城崎アートセンターホームページ
<http://kiac.jp/jp/aboutus.html>
- 豊岡演劇祭ホームページ
<https://toyooka-theaterfestival.jp/?fbclid=IwAR30aoFudVaozhl2IBR-5K6zPCpbJ7gC7-Kh2NpELTBSIWJuGwbOUO5Tk9U>
- 電通 第5回豊岡演劇祭実行委員会企画部会 2020
https://www.city.toyooka.lg.jp/res/projects/default_project/page/001/009/531/5kikakubukaisiryoku.pdf
- マームとジプシーホームページ「てんとてん～」2020年 ドキュメント DAY1-DAY7
DAY 2» [DAY 2 \(mum-gypsy.com\)](http://mum-gypsy.com)